

名探偵キズナアイ

桂ヒナギク

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

バーチャルYouTuberでおなじみ、キズナ アイが探偵になるお話。

・? K i z u n a A I

目次

1. キズナアイ、殺人犯を暴く	の巻	1
-----------------	----	---

1. キズナアイ、殺人犯を暴く の巻

どもども、バーチャルYouTuberの……じゃなくて、私の名はキズナ アイ。都内の公立高校に通う一年生である。

私は今、学校へ行くため、電車に揺られている。

「うわー！」

男性の呻き声。

満員のため、その姿は確認できなかったが、次の停車駅で仰天の出来事だ。

なんと、背中を刺された男性が、人が降りていった瞬間に露わあらになったのだ。

その様子を見た女性が、悲鳴を上げる。

「きゃああああー！」

何事かと思つた乗務員が、駆け出してくる。

「どうしたんですか？」

「あ……あ……あれ……」

女性が指を差した先を見ると、乗務員はびっくりしたが、すぐに警察に通報した。

駆けつけた警察が、電車の発着を中断させ、捜査を始める。

この車両に乗っていた人物は、そのほとんどが改札を出してしまつていた。

私はこの中に犯人がいると考えた。

容疑者は悲鳴をあげた女性、私の向かい側で座つて新聞を読んでいた中年の男性。そして車両の端でこちらを見ている女性。

「君、名前は？」

刑事が私に訊いた。

「キズナ アイですが何か？」

「ちよつと荷物見せて」

「いいですよ」

と、足元のカバンを手に取ると、なぜかチャックが開いていた。

「いやー、まさかそんなわけないよー」

刑事が私のカバンを調べると、血の付着したナイフが出てきた。
あれ？

「キズナさん、署までご同行願えますか？」

「ちよつと待って！ マジ待って！ え？ なんで私のカバンからナイフが？」

「君が刺したからじゃないのか？」

「待って。私は何もしてないですけど？」

「しかし、凶器は君のカバンから出てきた」

「いや、だから……」

その時、ある人物が北叟笑^{ほくそえ}み、電車を降りようとする。

犯人と思しき人物が行ってしまわれるー！

「待って！」

私は車両の端からドアに向かって歩いていく女性に声をかけた。

「真犯人はあなた、そうですね？」

「な!? 失礼なこと言わないで！ 私はなにもしてないわよ！ それに凶器はあなたのカバンから見つかつてるじゃない！ それが動かぬ証拠よ！」

「男性を刺した後、すぐに私のカバンに入れることだつてできますー！」
そう言い放つた後、私はその女性の胸に小さな赤い染みを見つけた。

「どうやら、悪いことはできないみたいですね」

私は女性の胸元を指差した。

「いや、これは……」

口を閉ざす女性。

警察官が女性を連行し、署で調べたところ、胸元の染みは被害者の血液であることが判明。女性は殺人罪で逮捕されることになった。

「疑って申し訳ない」

と、刑事が私に頭を下げる。

「私を逮捕してたら誤認逮捕になるところでしたね。ほんと、日本の警察は優秀ですこと」

皮肉をたつぷり浴びせてやる。